大阪日々新聞

二百五十四号

塩町一丁目ふ

母と娘の二人住さゐる稼もなれば細き煙を立かねる憂の中に母は又病の床ふすくらんで娘一人のいとんもせんすべもなく又外事を川竹ふ沈めるが母の薬用心の仇とする人も有るれど娘ふうきめもせんを亡父へうらして云分ゆくさうとて外ふ出るゆみれば食用も朝夕ふとを欠かくて詮なと成十二月廿七日夜病苦をしのびて三休橋の辺りを憐ひべし身を川中へ投し死すりうとさがしもらめ

娘はそこの見へ様驚きそこよ入水と聞てあるもなれど我身女のうゐなくて母養ふ心ふまゐぬのくるうるば非命ふ殺ず支皆我身の罪ゆうとそこもふ入水と三休橋より飛入ふ折ふ通る小舟の上ふかくれが舟頭推兵左厚くかいもして命へつがゆうりける

押鞠記

茂夢